

研究

横川先生と佐伯 (五)

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本保

佐伯地方で昭和二十四年以降、市町村合併促進法によつて、合併したり、新制をしいた町村の概況。

年次	概況
昭和二十五年	行政五區の改定により、小野市村と重岡村は火野郡から土南海部郡に編入された。
二六年	東上浦村が新制をいき、上浦町となる。行政規模の適正化の気運が盛り上がり、市町村合併促進法の制定に先駆け、川原木村と直見村が合併して直川村が誕生した。
三〇年	小野市村と重岡村が合併して宇目村が誕生した。西中浦村・中浦村・東中浦村が合併、鶴見村となる。蒲江町、新蒲江町、上八津村、下八津村の三村が合併して、新蒲江町となる。
三一年	青山村、下堅南村、休立村が佐伯市に合併編入。中野村、因尾村が合併し、本丘村が誕生した。
三二年	明治村、切畑村、上野村が合併し、弥生村が誕生した。
三六年	鶴見村が新制をいき、鶴見町となる。宇目村が新制をいき、宇目町となる。
四一年	弥生村も新制をしいて、弥生町となる。

以上のようによ県内は、一市一町二十村から、一市五町三村にまとまりました。

上浦町・佐伯市・鶴見町・米水津村・蒲江町は日豊海岸国定公園に沿い、本丘村・弥生町・直川村・佐伯市は整備された一級河川香匠川の水系に所属し、さらに、宇目町・直川村・弥生町・佐伯市は日本本線、国道十号線が縦貫してあります。

定期バスの路線は、佐伯駅を中心放射線状に各地に延びています。タクシーやマイカーも往来し、国道・県道の整備によつて、各市町村の距離は、一段と狭められました。

広域圏市町村行政は、今後益々重要視され、これに関連する行政需要も大幅に拡大するものと考えられます。その推進体制の強化を図ると同時に、積極的な方途を講ずる必要があらります。

バス路線の整備されていなかつた昭和十年代、横川先生は、リニックスワンクワンを背負つて、徒歩で、県南のナメズらまで踏破して、実地調査を行ないました。本丘村・因尾の古老からも、先生がたどった因尾の里に訪れた話と聞いています。

県立佐伯中学校地理科担当の一教師として、郷土の研究に取り組まれた、その情熱には頭が下がります。佐伯中学校在職二十年を記念して、「郷土の研究」の冊子を発行され、昭和二十四年春、郷里高知市におかえりになりました。広域圏市町村行政の角度から眺め、分析された先生の研究は、すばらしいと思ひます。

弥生町

先生の手作を再読する必要があらります。

国道十号線を利用すれば、車で北へ大分市まで約一時

間、南の宮崎県境まで三、四十分で走破できる好位置にあり、所道の整備も完璧です。近ごろ、国道十号線沿いの田ん田の中には、サービズ関係の店舗が目立ち、地の利と輸送の便で、加工関連の中小企業が進出していきます。

これまで年々減少していた所の人口も、昭和四十五年ごろから、少しづつ増加の傾向を示して、他の町村には見られない一つの現象をかもし出しています。

山地が所の全面積の八割を占め、所の中央部を番匠川が東流し、尺間山地に源を發した赤木川、井崎川が南に縫いながら合流しています。

所の主要産業は、米としいたけを中心にした農業で、果樹、園芸、畜産などにも力を入れています。林業方面では、造林に主力を注いで、その面積の拡大を図り、林道の整備も推し進めています。

数百年にわたって人々の信仰を集めている尺間神社には、県内外から多数の参拝者があります。山頂からは豊後水道が一望できて、その風光は絶景の一語に尽きます。佐伯史談会も新年初歩きなどで、たびたび登頂しています。

弥生町番匠大橋のたもとにある、次のような案内板の文字が人目をひきます。

日豊海岸国定公園

豊後水道

戒山公園

米水津海岸

嵯嵐の滝

直川村

村の中央部を、国鉄日豊本線と国道十号線が縦貫していで、佐伯市、大分市、また延岡市、宮崎市に通ずる要衝地帯です。

蒲江海中公園

鶴見半島

四浦半島

産業別就業人口は、第一次産業が約半数を占め、第二次、第三次産業がほぼ同数の状況にあります。したがって、主要産業は農林業で、米、畜産、葉たばこ、養蚕などが盛んですし、特殊作物として、たにし、かぼすを奨励して、その産地形成にも力を入れています。

村の周囲は、高峻でない山岳が連なっているため、面積の大部分は山地で、杉、松の宝庫だといわれています。村後場から南に四キロの赤木川の上流には、赤木ダムがあり、レクリエーションにも、最適の場所となっています。

村内を南北に流れる久留須川へ、飯河川番匠川水系の一つの流域には、キリシタン遺跡が点在しています。久留須の地名は、キリシタンのクルス(十字架)によるものといわれています。

近年、県道赤木、吹原、佐伯線(直川村大字赤木字吹原)佐伯市大字大越(同大字長谷字下城)の道路整備の工事が着々進められています。

佐伯市

佐伯市の中央を流れる番匠川は、壑田川、木立川を合せて佐伯湾に注いでいます。

リアス式海岸線の佐伯は、暖流黒潮の影響を受け、また、三方を囲む山脈によって寒風(北風)をふせぎ、四季を通じて温暖、冬に積雪をみることもまれです。

このように恵まれた気候風土から、戦前には農業、林業、水産業を中心とした第一次産業が盛んでしたが、戦後は旧海軍の土地も施設の転用を基礎に、立地条件を生かした臨海性工業都市の方向転換し、セメント、パルプ、合板、船舶などの生産力を入れて、現在に至っています。

しかし、他方では、海の汚染や悪臭・粉塵などの公害問題が次々に起こり、その後の工場誘致は足らぬ状態にあります。

昭和四十五年、重要港湾に指定された佐伯港は、大型船舶の接岸ふ頭、港湾道路などの整備が行われ、更に昭和四十九年度からの、大規模な港湾整備五か年計画がすすめられ、本年度は三徳田の港湾整備事業費の配分が決定しています。いわゆる「海洋流通拠点都市」としての将来が約束されようとしています。

戦前、戦中、戦後を通じて、佐伯港の良港といかに生かして、最大限に活用するかが、市民に課せられた一大研究テーマともいえましょう。

鶴谷と野岡山のうしろ岸壁、宿毛観光フェリー待合所に隣接して、佐伯港合同庁舎があります。そこには海上保安署、植物防疫所、佐伯航路事務所、法務省入国管理事務所佐伯港出張所、佐伯税関署、検疫所などが設置されています。巡視船さちかぜも、待機の形で岸壁につながれています。

国道十号線には近いし、国道二一七号線、延岡―佐伯線、さらに放射線状に各町村に通じる県道の整備、高知県宿毛市とのフェリー就航などによって、佐伯市は海陸とも県南要衝の地として、脚光を浴びつつあります。この地域の生産物の大半が、前記の交通路によって集められ、加工されて、国内、国外に送り出されています。一例として挙げれば、主要産業である製紙業は、市内および県南町村の木材資源を背後にひかえ、また湾内には、南洋や米国からの輸入材を貯木し、整備された木材団地で、製材、加工の生産をつづけ、木材基地としての役割を果たしています。これに加えて佐伯港は、外材の輸入基地、配送基地として、大発展を期したいものです。

木材団地の近くには、鉄工団地も形成されていますが、その進展も期待されています。

既存の白杵鉄工佐伯造船所、本田・三浦両造船所、二平合板、日本セメント佐伯工場、それに興人佐伯工場とそれぞれ設備をすすめ、規模の拡大を図り、大工場として、佐伯港一帯にひしめいていくのは、実に壯観です。

ところがその反面、この工場関係や都市化の進展によって、海や河川の汚濁がひどくなり、騒音、大気汚染も漸増の傾向にあり、特に水質汚濁は重要な問題となつていきます。そこで佐伯市では昭和四十五年十月、公害課を新設して、公害対策に取り組んでいます。

住民の健康管理と、環境の保全を第一義として、「公開の原則」にもとづき、法的強制力や公害防止協定を結んで、社会的制裁措置とも講じようとしています。

一月下旬、大分県は佐伯港のヘドロを処理するため、事前調査を行いました。地質、水深測量とともに、ヘドロのしゅんせつ方法や、第二次公害防止対策を決める資料とするために、潮流、潮向などを測定しました。

市当局も、指導、勧告、改善命令などを強化したり、大気、水質、騒音関係の公害監視についての測定器の整備に力を入れています。

一方、市民の間にも公害追放市民会議が昭和四十五年秋に結成され、以後一般市民による監視も漸くすすみ、特に漁業関係者からの強い協力があって、相俟って数々の効果をあげています。

住みよい街づくりは、一公害課だけの仕事ではなく、全市民が取り組んでいかねばならない重要課題です。「明るく、健康で、災害のない、豊かなまちづくり」のために、みんなが力を合わせて努力したいものです。

「佐伯二万石、浦でもつ」といわれたように、昔から

佐伯は、漁業によって栄えてきました。最近水産資源の枯渇、漁業近代化の遅れ、工場及び家庭排水による漁場の変化等によって、漁業の不振な状態が続いています。市の漁業振興策として

水産資源の維持培養
生産基盤整備

近代化等

水産流通基地の移転整備

漁協の育成強化

などがとりあげられています。佐伯港（女島公共ふ頭、鶴谷ふ頭、葛ふ頭の三つ）を最大限に活用し、一大水産基地としての活路をみつけ、その打開の方途を発見したものです。

農業方面では、水田面積の関係上、米作純農家は僅少で、郊外の農家はほとんど兼業農家です。

米の生産調整による転換作目の一つとして、木立地又は採用されたいちご栽培は漸次軌道にのり、県外（北九州方面）にまで出荷されて好評を博し、その成果は見るべきものがあります。木立の西ノ子には、市農協木立支所と同居して、昭和四十七年度第二次農業構造改善事業として、市農協いちご集荷所が設けられています。

同じく構造改善事業推進のもとに、いも、麦作を取りやめて、及びかん栽培が盛んに行われ、海崎には、昭和四十五年度農業構造改善事業及びかん送果所（佐伯市広域）、佐伯市柑橘出荷農業協同組合連合会柑橘送果場などの施設設備があります。

世界をあげての食糧危機が論議され、その自給対策が叫ばれています。休耕田補償制度もなくなりました。農政も方針を修正せざるを得ない、むずかしい段階に立ち至っています。

昭和四十九年四月、佐伯市長に対して、佐伯市総合計画審議会（会長高山善吉）は、長期総合計画の答申をいたしました。

その計画の内容は、産業の振興、生活環境の整備、社会福祉の充実、教育文化の発展などを目指し、新全国総合開発、大分県基本計画、佐伯地域広域市町村圏計画と密接な関連性を保ちつつ、市の特性を生かしたまちづくりを目指しています。

佐伯市の未来像は

- 一、海と緑の海洋流通都市
- 一、人間性豊かな都市
- 一、県南中核総合都市

とされ、それを目指して、着々その実績をおげつつあります。

特に、県南の中核都市としての佐伯市は、広域市町村圏計画において、その中核的機能を果さなければならぬ。また佐伯市の発展は、県南八町村の進展なくしては考えられない実情にあります。

広い視野からのまちづくりが大切です。（かわり）

（余白に）

石打の麓をたずねて

二月十三日午後、二三の友を誘って、石打（佐伯市堅田石打区）に梅をめぐり、谷間街道を歩いて石打の麓を尋ねた。梅はもう盛りをすぎているが、あれこれ落ちいながらの山道を歩くのは楽しい。谷のせはまった森の中、ほらかな高い山山から、どうどうの音を立てて麓の水が落ちていた。高さは三十数メートル、勢よくほとほと、山を駆け下りてく（坂からのぞいて見たら大な滝穴になっていた）、それから岩層をくぐり、形に折れまがって、さ、おやかな音を立てながら、麓の区に注ぎこんでいる。

春よよかろうが、夏は最高であろう。秋も紅葉が期待出来る。石打のバス停から歩いて十五分位の近さである。

（明安）